

## 『ジャック・ロンドン 多人種もの傑作短篇選』を読む

辻井 榮 滋

## I

筆者が学生時代にジャック・ロンドン（1876-1916）に魅せられ<sup>1)</sup>、その後本格的に研究を始めたのは1972年のことである。そうして処女論文を世に問うたのが、1975年10月。「ジャック・ロンドン：その習作期に於ける作品についての一考察<sup>2)</sup>」と題する一篇であった。以来40年ほどの歳月が経過した。この間、数多の論文・著書・訳書・エッセイ集の公刊および講義・講演を通してロンドンおよびその作品の追究と紹介に努めてきたが、このたびあらたな短篇集を翻訳出版した<sup>3)</sup>のを機に、ロンドンのまたあらたな側面について考察してみたいと思う。

今も筆者の手もとに、*THE LONDON COLLECTOR*, No.3という1冊がある。すでに表紙が半ば色あせてはいるものの、うすい青色地にタイトルとナンバー、それに中央に『ロウマー』号とおぼしき絵がいずれも黒色で鮮明且つ<sup>か</sup>シンプルな装いをとどめている。1971年12月（Cedar Springs, Michigan）発行とあり、その編者から筆者に贈られたもので、

For Eiji Tsujii

With kindest regards,

James E. Sisson

Berkeley, California

July 3, 1973

と自筆で書き添えられている。同じタイトル・ページ（扉）にNo.3の中身のタイトルがJACK LONDON'S ARTICLES AND SHORT STORIES IN *THE (OAKLAND) HIGH SCHOOL AEGIS* とある。そして p.1 の INTRODUCTION の書きだしが、以下のように始まっている。

Wanderjahr 1894 had been the incentive that Jack London needed; The Road experiences had convinced him that he should be a “brain merchant” and that an education was a necessity. Consequently, in January, 1895, he enrolled in Oakland High School, and remembering his initial literary success—the “Story of a Typhoon off the Coast of Japan” in *The Morning Call* in 1893—he immediately sought out the school literary magazine—*The High School Aegis*. His first article accepted by the magazine

was “Bonin Islands,” published in two parts on January 18 and February 1. …

そのように『イージス』に発表されていった計9篇の作品についての紹介や要点を掻い摘んでみせたのが、筆者の上記の論文であった。“Story of a Typhoon Off the Coast of Japan”から始まって、『イージス』掲載の9篇中4篇までもが、日本とのかかわりを持つ。後年“冒険作家”の異名をとるようになるロンドンが生まれてはじめて踏んだ異国の地が日本であったことも考えあわせると、まさに奇しき縁としか言いようがない。さらには、日露戦争時(1904年1月25日～2月6日)に従軍記者として滞日し、幾多の障害にぶつかりながらも朝鮮や満州まで精力的な取材を続けたのち、帰途にも(同年6月中旬に)横浜から出港しているのである。……

ところで、著名な伝記作家I・ストーンは、ロンドンのことを「馬に乗った水夫」(“Sailor on Horseback”)と命名した。まことにもって言い得て妙である。最終的には都合1,400エーカー余りに及ぶ大農園主になった(=馬に乗った)わけだが、海との関係もあまりに深く、それも終生かかわりを持ち続けた(=水夫)からである。生まれ育ったのが風光明媚なサンフランシスコ湾岸地域という人間なら、無数にいる。それでも、10歳にして小舟を買い、思春期の大半をオークランドの海岸通りで過ごし、「14歳の頃、昔の冒険的な航海者の話で頭がいっぱいになり、熱帯の島やはるか海の果てに思いを馳せながら、サンフランシスコ湾やオークランド河口で可動竜骨のついた小舟を走らせ<sup>4)</sup>」、15歳にして牡蠣泥棒の群れに身を投じたり、……、となってくると、俄然異色を帯びてくる。さらには、サン・パブロ湾やサスン湾、その上流のサクラメント川あたりを行き来するぐらいならまだしも、いよいよ「金門海峡<sup>5)</sup>を出て、全世界のとてつもなく大きな冒険に通じ」るまでに立ち至るのである。幼少時からの“本の虫”が高じてその冒険心に拍車をかけていたことは、言うまでもない。そうして“冒険作家”ロンドンは、まさに海を通して地球を駆けぬけたのだった。海は、さまざまな国や地域、そして人々との接触・交流を可能にした。日本を皮切りに、極北のクロンダイク地方、朝鮮、中国、英国の首都の貧民窟、ハワイを始めとするポリネシアおよびメラネシアの島々、オーストラリア、エクアドル、メキシコ等々数知れないほど世界じゅうを駆けめぐった。『スナーク』号で世界一周旅行を敢行した際、

「……ここには海と風と波がある。世界の海と風と波がある。……ここには、陸の生活から海への生活への難しい適応はあるが、それを実行することが、小さな震える自我である僕にとって<sup>6)</sup>は喜びなのだ」

と、自ら語っている通りだ。そうした海からの所産が上述の数篇の習作であり、また職業作家としては *The Cruise of the Dazzler* (1902), *The Sea-Wolf* (1904), *Tales of the Fish Patrol* (1905), *The Cruise of the Snark* (1911) 等として結実を見た。代表作である *Martin Eden* (1909) や *John Barleycorn* (1913) その他にも、無論海は随所に活かされている。

さて、前置きが少々長くなったが、本論の『多人種もの傑作短篇選』に入ろう。広大な海を巡航し先々を訪ねることは、すなわち大勢の人々——人種/民族——と出会うことでもある。ロンドンの場合、すでに見たように、その数・種類は驚愕に値する。況してまだジェット機も高速鉄道も存在しなかった1世紀以上も前の時代だったが故に、いっそうその度合いは増すのである。

折しも現代のロンドン研究者J・リースマンが、ロンドンの人種問題を扱った評伝を著わした。

その中で彼女は、

If he spoke of his admiration for “Anglo Saxons” and used racial stereotypes, especially in his nonfiction and novels, London’s greatest appeal to readers around the world was and is his exposure of injustices committed in the name of class or racial superiority and heroic resistance against them.<sup>7)</sup>

と書いている。複雑な労働市場絡みの圧倒的に白人優越主義濃厚な時代状況にあったにもかかわらず、地球を駆けぬけ数多くの人種・民族等と接触しさまざまな共感や理解を得、時には反撥すら覚えたことによって、ロンドンがそうした状況から果たしてどの程度踏みだせ、そうした異常心理をどこまで克服でき、とりわけその作品群を着遍的なレベルにまで昇華できたのか。そこからあたりが、ロンドンおよびその作品を追究するうえで究極的には不可避であり、行き着くべき所になるのではないだろうか。

## II

本稿においては、今回数ある多人種ものなかから精選し、翻訳して編んだ表題の訳書に収めた8篇について、前章で指摘したあたりを中心に論を進めてみたい。

まず、8篇ともに多人種・多民族に絡む諸問題を扱っている。本章では、雑誌発表順に配列した結果として、たまたま“日本”が舞台・背景となっている作品2篇を取りあげる。

i) 「小笠原諸島にて——1893年、アザラシ狩り船隊の一件」(以下「小笠原諸島にて」と記す)<sup>8)</sup>

まず最初は、前章冒頭で紹介したオークランド高校の文芸誌『イージス』に最初に（IとIIに分けて——1895年1月18日と2月1日に——）掲載されたロンドンのいわば記念すべき作品である。

Iは、

こんなに美しいのに、ほとんど知られておらず、めったに人の来ない所がほかにあるだろうか。(中略) 言い伝えによると、小笠原諸島は250年前に、日本の大きな平底帆船はんせいかんがこの島の沖合で台風に遭遇したあと、日本に引きかえす途中で発見されたという。<sup>9)</sup>

の書きだしから始まり、島の歴史や景観等について実に事細かに調べあげている点は見逃せない。そして、「1年に2回、港の単調さが破られるのは、政府の蒸気船がやって来る時だけである」(p.12)で終えている。次いでIIに入るや、一転外国船が到来し、島の静穏が破られる。

このように住民たちは、のんびりと刺激の少ない日々を送っていたが、私が小笠原諸島に行ったその年（1893年）には、夢のような生活からすっかり目覚めた。(p.13)

から始まり、強烈な「衝撃」やら「緊張感が走る」のである。

この船は、約8千キロ離れたアメリカの海岸からやって来た、向こう見ずなアザラシ狩り用

のスクナー型帆船の1つで、以後にやって来るアメリカ漁船の先駆けでもあるのだ。(pp. 13-4)

さらにはまた1隻の外国船が入港する。村は大騒動となる。「3月の中旬までには、何と15隻のアザラシ狩り船隊が小さな港に集結する」(p. 14) という事態と相成る。畜牛の大虐殺やら夜のドンチャン騒ぎやらを起こすが、「村人に対して尊厳を傷つけるような行為や不法行為はっさい行なわなかった」(p. 18)。そのうち、

船隊は、日本沿岸地方へと向かうのだ。夏になると、アザラシが周期的にそこから北上し、ベーリング海の集団繁殖地まで移動するので、船隊がそのあとを追いかけるというわけだ。(p. 19)

そうして外国船はいなくなり、島は再び静穏に包まれる。このⅠとⅡの絶妙のコントラスト——とりわけ、その静と動の落差の何とも鮮やかなこと。

「日本沖合での台風」の場合と同じく『ソフィア・サザランド』の体験は、もののみごとに活かされた。1893年1月23日から51日間を要した船旅で小笠原に立ち寄り、10日間そこに碇泊し、さらに3ヵ月間にわたってベーリング海での凄絶なアザラシ狩りに従事して、帰途には横浜に2週間滞在し、さらに37日間かけて8月26日にサンフランシスコまでもどるという都合7ヵ月にも及ぶ一大“冒険”となったわけだが、わずかに17歳での想像を絶する荒くれ男たちとの“海”体験は、その後の人生や職業作家としてのロンドンに決定的なインパクトを脳裏に焼きつけたのである。

「小笠原諸島にて」について今回あらたに気づいた点を2点ばかり記しておきたい。“多人種もの”の観点からすると、「50ぐらゐの種族から成る未開の地の先住民たち」(pp. 9-10)を始め、

これらの先住民たちは、<sup>うたぐ</sup>疑り深い性格の持ち主として、ハワイをはじめとする南洋諸島から最初に定住した人々と、初期の頃に捕鯨船を棄てて居座ってしまった裏切り者たちの子孫の血が入り混じっている。(p. 10)

と、かなり詳細に言及している点である。

これらネイティヴの島に今回入港したアメリカ人、イギリス人、ノルウェイ人等が加わるわけだから、“多人種”も相当なものである。加えて、その細やかな筆の配び方にも驚かされる。17歳での原体験がそのちょうど2年後に活字の形になったわけだが、その間18歳時の(4月初め～10月初めの)半年間には、何とも広大な北米大陸を放浪しているのである。これまた途轍もない体験の連続であり、そのたった数ヵ月後の「小笠原諸島にて」その他8篇の順次執筆および『イージス』掲載と相成るのだから、普通にはとうてい及びもつかないことである。しかしながら、くり返しになるが幼い頃からの本の虫、大洋に馳せる夢、そして上述のあり余るばかりの体験、さらにはそれらによって育まれていった<sup>けいがん</sup>慧眼と筆力とが、やがて彼をエネルギーギッシュな職業作家へと導いたのであろう。

「小笠原諸島にて」は、舞台・背景の点ではきわめて小さな世界の描写にしかすぎないが、人種・大自然等々の点でのちの作家としての力量を彷彿させるに足るすこぶる大きな第一歩を画す

る作品とはなった。先の I・ストーンも、こう絶賛している。

……一種の気魂きはくもあれば、新鮮さと活気にあふれてもいて、これだけ時代がへだたっていて、  
も愉しめる読物になっている。捕鯨船団や小笠原諸島の描写は眼に見えるようだし、登場人物も人間味のある愛すべき者たちだが、何よりも文章そのものが言葉の音楽だと言っている。<sup>13)</sup>〈傍点引用者〉

ii) 「人力車夫さかいちやう 塚長14)と妻と、2人の息子の話」(以下「塚長」と記す)

2つめは、上述の横浜で2週間を過ごした折の滞在記の1つで、うち1週間は塚長の操る人力車で下町を駆けめぐり、残りの1週間は東京と富士山への旅を試みたようである。

日本語や固有名詞の読みとりにくさもないではないが、何ととってもわずか2週間の滞在である。往路で小笠原諸島に立ち寄った体験以上に復路の日本本土は目新しく、珍しい人・物・光景等に満ちあふれ、17歳の若者の心を踊らせたことであろう。「小笠原諸島にて」よりも短いものだが、これはこれで実に味わいのある思い出深い記録になっている。そこで少し長くなるが、試しにはじめて原文を *THE LONDON COLLECTOR*, No.3 (p.4) から引いてみることにしよう。家に上がって、キセルを使ってタバコを吸い、次いで緑茶をよばれ、いよいよ食事に移る1節である。

According to Japanese custom, Hona Asi did not eat with us, but waited on the table as a true wife should. She removed the covering from a round wooden box, and with a wooden paddle ladled out two bowls of steaming rice, while Sakaicho uncovered the various bowls on the table and revealed a repast fit for the most fastidious epicure. The savory odors arising from the different dishes whetted my appetite, and I was anxious to begin. There was bean soup, boiled fish, stewed leeks, pickles and soy, raw fish, thin sliced and eaten with radishes, kurage, a kind of jelly fish, and tea. The soup we drank like water; the rice we shoveled into our mouths like coals into a Newcastle collier; and the other dishes we both helped ourselves out of with the chopsticks, which by this time I could use quite dexterously. Several times during the meal we laid them aside long enough to sip warm saki (rice wine) from tiny lacquered cups. 〈下線引用者〉

食事に限ることではないが、何という観察力であろう。よくなじんだ西洋式のものならまだしも、はじめて踏んだ慣れない異国の地である。「塚長」という小品全体が、明治の日本人の生活の一端をすこぶる細やかに捉えている。下線を引いてみた「御櫃」「杓文字」「味噌汁」「煮魚」「ネギの煮物」「醤油味の漬物」「刺し身」「箸」「御猪口」「燗酒」等、今日の日本人でさえ日本の家庭料理をまるで手に取るようにありありと思ひ浮かべることができる。17歳の頃にして早くも、事こまかにメモを取る習慣を身につけていたことの証あかしでもある。

もう1点留意すべきは、全体の3/4にあたる前半部における塚長宅での心尽くしの接待の様子の臨場感と、残り1/4ほどにあたる仰天の話——一転、火事で亡くした塚長の妻と息子の葬列に

遭遇したこと——との、やはり対照・落差には、「小笠原諸島にて」を読んだ直後だけに感じ入らざるを得ず、のちの物語作家としての優れた資質が読みとれる。そうしてこの話は、次の1文で終わりを告げる。

母国と日本は約8千キロの荒々しい海で隔てられてはいるが、堺長と妻君のことも、その息子に寄せた2人の愛情のことも、一生忘れはしない。(p.29)

2週間の滞日といえば、あのラフカディオ・ハーン（小泉八雲）にも若干言及しておかねばならない。彼は、1850年の生まれだから、ロンドンとは25、6年ほど年長で、来日が1890年4月（40歳）のことである（この当時ロンドンには14歳）。すでにアメリカで数紙の新聞記者経験を有したあとの訪日であった。そのハーンが島根県松江市で英語教師をしながら、“神々の地”を巡り、古き良き日本に心酔して、『知られぬ日本の面影』全2巻（1894）や『怪談』（1904）を出版したことはよく知られている。そのハーンが、最初の著書の「はじめに」でこう記している。

たかだか4年余り日本に交じって暮らしただけでは、たとえ、その社会の習俗を取り入れようと努力したにせよ、しょせんは外国人の限界は免れないであろう。かくも不思議なこの国に精通するには、4年くらいではとても及ばないのだ。<sup>15)</sup>〈傍点引用者〉

そして「東洋の第1日目」は、奇しくもロンドンと同じ人力車による旅であった。

人力車ほど居心地のよい小型の車は、想像ができない。そして、わらじ履きの車夫の動きに合わせて揺れる、キノコのような笠越しに見える通りの景色には、けっして飽きることなく、あれこれと空想をかき立てられるばかりだ。<sup>16)</sup>

と。訳者の池田雅之氏が同書の中でも書いている通りその後は、「おもはゆくなるようなナイーブな日本賛美があるかと思えば、いささか極端とも思える西洋批判も出てくる」(p.340)という具合だ。思い過ごしとも思えるほど“古き良き日本”を賛美しているのである。

『知られぬ日本の面影』出版までの滞在期間（松江だけでも1年3ヵ月足らず）とわずか2週間、年齢も40歳と17歳とあれば、両者を単純に比較することなどできないが、19歳のロンドンが書いた文章は、2篇とも淡々としていて、「おもはゆくなるような」ところは無論、人種偏見もない。たしかに結果的には、古き良き日本の有りようを克明に伝えようとする努力というか、情愛あふれる庶民の<sup>17)</sup>気質がそこここにはじみ出ており、現代日本人の多くが失ってしまったものに思いを致させてくれるのではあるが。

### III

ハワイを舞台にした2つの短篇「さよなら、ジャック<sup>17)</sup>」と「ハンセン病患者クーラウ<sup>18)</sup>」に移ろう。実はこれらに関しては、すでに「ハンセン病を扱ったJ・ロンドンの2短篇」と題し訳者ノートも付して、初訳を試みている。（『立命館経済学』第53巻第2号、2004）。さらには、「ハンセン病問題とジャック・ロンドン」（同上、第56巻第2号、2007）と「J・ロンドンのハンセン病もの短

篇群を読む」(同上, 第57巻第4号, 2009)の2本の論文も発表し, かなりの分析・追究を行なったので, ハンセン病等の詳細についてはそちらに譲ることにしたい。本稿では, (多)人種の観点からロンドンがどのように考えていたのかを中心に付言するに留めることにする。

「さよなら, ジャック」ではその冒頭から,

ハワイでは超排他的な層というのは, 「宣教師グループ」である。知ればいささかショックを受けることだが, ハワイでは, 名もなく殉教することを求めるはずの宣教師が, 金持ちの上流階級の上座にすわるのである。けれども, それは事実だ。19世紀の30年代に登場した控えめなニュー・イングランド地方の人たちが, カナカ人に, 真の宗教——唯一無二の正真正銘まぎれもない神の礼拝——を教えるという高尚な目的のためにやって来た。それと, カナカ人の教化とに大成功したので, 第2ないし第3世代までには, カナカ人は事実上絶滅した。これは福音書の種が実を結んだわけで, 宣教師たちの子孫(息子や孫)が島々自体——土地, 港, 町の用地, それに砂糖栽培場——を所有することになった。命の糧<sup>かて</sup>を与えにやって来た宣教師が, 居残って, 異教の祝宴をそっくりむさぼり食うことになったという次第である。(p.149)

と, 商人とともに, 2種類の白人グループがハワイ一帯を占拠した事実を, 多少の揶揄<sup>やゆ</sup>も含めたきびしい調子で指摘する。この件といい, 大富豪カースデイルと大ムカデの一件といい, 物語のどんでん返しとなる絶世の美女で「ハワイ史上で最上の生え抜きの女性歌手」(p.155)ルーシー・モクヌイの罹病による不条理な別離の場面等といい, 一読しただけではすぐには承服しかねるテンポの速いストーリーの展開ではあるが, 100年以上も前(1907年)当時のハンセン病をめぐるあのさまざまな状況下にあって, 白人・ポリネシア人・大金持ち等々の区別なく等しく罹病する現実を作品でもって浮き彫りにしてみせたことの意義は, きわめて大きい。リースマンも書いているように,

“his tales of whites infected with leprosy, “Good-by, Jack” and “The Sheriff of Kona,” coupled with the defiant leper hero of “Koolau the Leper” in *The House of Pride*, alarmed London’s white Hawaiian friends, the missionary-descended leaders of the haole kama’āina.”<sup>19)</sup>

だったのだから。にもかかわらず, 妻チャーミアンとともに自らモロカイ島まで足を延ばし, 患者たちと交流し, 入手できるかぎりの関係図書を読み, 専門医らとも相当時間語りあうといった積み重ねの上に書きあげた作品には, 確たる観察力と自信が垣間見えるように思う。

同様のことが, もう1つのハワイもので文字通りハンセン病を扱った「ハンセン病患者クーラウ」についても言えよう。舞台は, カウアイ島。主人公のクーラウは言うに及ばず, 他の登場人物たちキロリアーナ, カパヘイら30人ほどの同行者にも深い共感と理解が示され, この作品が人種偏見などみじんもない優れた作品に仕上がっていることだけを付言しておきたい。

「ハンセン病問題とジャック・ロンドン」を執筆した際, 熊本地裁判決とそれに伴う国の控訴断念を取りあげて, 今後も「つねに偏見や差別を逃さず社会に対する啓発活動を継続してもらいたいものである」と記した。その後目立った記事はなかったが, 最近, 「真宗大谷派ハンセン病

問題全国交流集会」が4月12～13日に開かれたことが、その当日には小さく、3週間ほどのちに大きく取りあげられた<sup>20)</sup>。上記拙論執筆時前（2004年）の療養所入所者の平均年齢が約77歳であったのが、7年を経た現在では82歳になっているという。そして「2009年に施行されたハンセン病問題基本法は元患者の名誉回復と医療福祉の充実をうたうが、元患者を取り巻く現実は今なお厳しい」との指摘を補足しておきたい。

#### IV

今回の『短篇選』では、文字通り中国人を主人公にした作品が4篇と最多である。そのうちの「比類なき侵略」（“The Unparalleled Invasion”）に関しては、筆者の最初の論文でも多少取りあげているので、本章では残りの3篇について少し詳しく考察してみることにしたい。

ロンドンが中国人（だけに限らないが）を主人公にした物語を書くと、きわ立ってスケールの大きな世界が生まれるようである。世界を股にかけ<sup>しつぷうもくう</sup>榊風沐雨の体験を重ねた彼ならではの腕の見せどころと言えようか。本章で取りあげる3篇はいずれも、“多人種もの”を考えるうえでこのほか秀逸である。

##### i) 「支那人」<sup>21)</sup>

第I章では日本、第II章ではハワイが舞台となっていたが、本章で扱う3篇のうちこの「支那人」はポリネシア、それもタヒチが舞台である。あの世界一周旅行（予定では7年計画——実際には、都合2年余りで終結）の際に、4ヵ月余りハワイに滞在のあと南下して、1907年2月27日に立ち寄ったのが、通称“南海の楽園”タヒチ島のパーピエイテイであった。それから、（1週間ほど途中帰米の中断はあったものの）翌年の4月までこの島を中心に過ごしたのだった。実はマーケサス諸島やタヒチ、サモア一帯は、ロンドンが子供の頃に読んで大いに触発された作家H・メルヴィルやR・L・スティーヴンソンが過ごした地であり、ぜひとも訪ねたいとの年来の願望を果たした所なのであった。（そういえば、ほかにもサマセット・モームや画家のゴーギャンやマティスなども、タヒチに魅せられた人たちであった。）現に、サモア島のアーピーアーに錨をおろし、

スティーヴンソンの住んでいたヴァイリーマという名前の家まで出かけていった。その閉ざされた家を可能なかぎり窓からのぞいて調べたあと、山頂にあるこの作家の墓までてくてくと歩いた。ジャックは、チャーミアンのほうを向いてこう言った。「これが他の人物の墓だったら、わざわざ訪ねたりしなかったら<sup>22)</sup>」

と、その執念すら伝わってくる。

そんな“南海の楽園”にも、もう1つ別の顔がある。世界地図で見れば判然とすることだが、南太平洋の島々の多くは、“大航海時代”と呼ばれる主として欧米諸国の探険家たちによる発見の時代を経て、それら諸国の植民地となった。タヒチも、無論例外ではない。1842年にフランスの保護領、1880年にはフランスに併合され、今日までフランスの影響下にある（現在は内政自治政府）。ロンドンが訪ねた1907～8年当時はしたがって、とりわけその強い支配下にあった。



ロンドンが書き残した優れた短篇「支那人」にも、そうした植民地状況下の別の顔を持ったタヒチが手ぎわよく描かれている。主人公は阿<sup>アー・チョ</sup>仇。正真正銘の中国人。実は、作品の背景には次のような歴史的事実があった。

1860年代に入り、タヒチでの労働不足を補うために、植民地政府は新しい解決方法を見出した。それは、中国人労働者の導入であった。綿花とコーヒー農園の経営者J・スチュアートは、香港で採用したクーリー（労役夫）の来島許可を1863年に得た。この結果、1864年から、337名、324名、357名の中国人が相次いでタヒチに到着した。（中略）中国人は礼儀正しく、多くは独身で、ポリネシアの社会に溶け込み、フランス語の代わりにタヒチ語を習得していた。中国人の仕事は評価され、認められていた。<sup>23)</sup>〈傍点引用者〉

短篇のストーリー自体をひとことと言ってしまうと、アー・チョとアー・チョウのひと文字違いで断頭されることになるアー・チョの、皮肉にもはかない物語、ということになるが、事はそう簡単ではない。上に引いた歴史的事実が重くのしかかり、それは、

阿<sup>アー・チョ</sup>仇は（判決を）待つうちにも、自分の人生をふり返り、契約書に署名をしてタヒチに向けて出航した頃までを思い起こしてみた。故郷の海岸の村では不景気な時代で、南太平洋へ行って5年間メキシコ貨幣にして1日50セントで労働する契約を結んだときには、運がよいと思った。（p.55）

という描写ときちんとかみ合う。しかも彼は、5年の年季のうちすでに3年を務めており、故郷に馳せる思いには並々ならぬものがある。

そこへ殺人事件が突発し、その場にいあわせた彼はやってもいないのに、20年の有罪判決を受けてしまう。同じくやっていないアー・チョウには断頭というまるで納得のいかない判決がおりる。このあたりから、アー・チョの運命が着実に狂いだす。「自分たちが犯してもいない罪に対する重い処罰は、白人どもがやらかす無数の奇行とまったく同様にわからないものだ」（p.61）等、以後は愚かな手違いがエスカレートしていく。そしてまさに致命的な過ちが、裁判長自らの手で犯される。

たまたまこの裁判長は、前夜にフランスの軍艦の艦長と航海士たちに晩餐会を催していた。命令書を書きあげる時のその手は震え、目もものすごくずきずきと痛んでいたのに、命令書を読みかえしもしなかった。どっちみち、自分が署名して渡すのは、たかが支那人1人の命じゃないか。そこで彼は、阿<sup>アー・チョウ</sup>丑の名前の最後のウを書き落としたことに気がつかなかった。命令書は「アー・チョ」と読めたのだ。（p.63）

この時に、主人公の運命が決まるのである。あとは、憲兵のクリュシヨによって農園のあるアーティマオーノウまでの20マイルの道のりを荷馬車で連行される。この間にもクリュシヨが間違いに気づいたりして何度か助かる機会がちらつくのだが、「しよせん支那人1人にすぎない」とことと職務遂行とが優先され、死刑執行現場に着く。そこには、綿花農園の監督のシェンメールと巡査部長がいる。2人も手違いに気づく。だが、

「その500人の支那人たちの仕事をもう3時間分も無駄にしちまいましたぜ。ほんとに処刑される者のためにもう一度何もかもやり直しなんてことはできやしません。やはりこの仕事を片づけてしまいましょ。たかが支那人1人のことなんですから」(p.74)

となる。おまけに巡査部長は巡査部長で、この日の午後小旅行をして恋人に会いに行くことが念頭から離れない。物語の初めから一貫して「たかが支那人1人」やそれに類する表現が続いて、阿仇<sup>アー・チョ</sup>の22年の生涯がギロチンによって幕を閉じる。

それにしても、殺人現場の描写 (p.60) といい、容赦のない「綿花畑での焼けつくような労役」(p.56)の数々といい、阿仇がクリュショによってアーティマオーノウまで護送される場面といい、はたまた最終の絞首台に送られる様といい、息をもつかせぬ迫力ある映画のシーンのごとく緻密<sup>ちみつ</sup>に計算され尽くしている。さらには、そうしたシーンを縫うように、支配者のフランス人たちと日雇い人夫の中国人たちとのあいだに立ちはだかるいら立つような言葉の行き違いがあり、そして阿仇が時折夢見る「瞑想と休息の庭」が気休めのように数回にわたって用意周到に配されてもいる。1つだけ拾ってみる。

……家の裏には小さな菜園と、瞑想と休息の場があって、小さな池には金魚が泳ぎ、数本の木には風鈴がチリンチリンと鳴り、周囲には高い塀をめぐらして瞑想と休息の邪魔にならないようにするんだ。(p.55)

この飛び石のように挿入される「朝穩<sup>あさむら</sup>の庭」(p.62)の夢想は、阿仇のあきらめ<sup>あぶ</sup>を炙り出すように、あまりに過酷な現実と鮮烈且つ奇妙なコントラストを見せている。

最後に、人種的観点からひと言。R・キングマンも書いているように、

In “The Mexican,” “The League of the Old Men,” “The Chinago,” etc., he reveals his own race as brutal oppressors and portrays minorities with sympathy and understanding. (「白人を野蛮な迫害者として暴き、共感と理解を示しながら、少数民族を描<sup>24)</sup>

き、人生の不条理を徹底的に追求した、歴史的にも価値ある秀逸な短篇と断言できよう。ちなみに、この作品の執筆・脱稿は1908年4月、すなわち『スナーク』で航海中のタヒチ滞在前後のことであった。

## ii) 「椿阿春<sup>チュン・アーチュン<sup>25)</sup></sup>」

この短篇は、文字通り主人公の中国人名がそのままタイトルになっている。“多人種もの”としては、多人種混<sup>こんこう</sup>淆を先取りした格好のひじょうにスケールの大きな作品である。

同じ中国人でも阿仇とはさまざまな意味で大きな違いがある。(ただ、生まれと育ちは両者ともに貧しく苦しい中国農民。) 上に見たように、阿仇が奇々怪々な変転の末にたった22歳で断頭台の露と消える物語であったのに対し、椿阿春の場合は、6歳から24歳まで奴隷として働き、それから「逃亡して、ハワイの砂糖栽培<sup>プランテーション</sup>場で3年間日給50セントで働く日雇い人夫として契約」(p.111)する。彼はきわめて注意深く(観察力が鋭く)、「3年が終わる頃には、サトウキビの栽培にかけては現場監督はおろか支配人以上に」(p.111)熟知しているまでになる。さらには、

人間がいかにして砂糖工場や栽培場の所有者になるのかまで突きとめたのだ。(中略) 人間は自ら汗して金持ちになるわけではないということだ。(中略) 金持ちになる人間というのは、他人が汗水垂らして働いてそうなるわけだ。それが一番金持ちの人間ともなると、そのつのためにあくせくと働く最大多数の同胞を持っているやつなのだ。(p.112)

といった労資関係構造を見抜くようにまでなる。ブルジョアないし支配階級に対する痛烈なアイロニーであり、無論、ロンドン自らの経験がにじみ出る労働観ないし社会哲学の面目躍如たるものがある。

さて椿阿春は、まもなく小さな輸入店を始め、「阿春・阿楊<sup>アーヤン</sup>商会」に成長、投資に次ぐ投資を重ねて、大成功を取める。このあたりまでならよくある“rags-to-riches” (大出世物語) にすぎないが、ステラ・アレンデイルという女性との結婚によって状況が一変し、“多人種もの” が台頭する。彼女は、「アングロ・サクソン人の血が8分のいくつ、ポリネシア人の血が16分のいくつ、(中略) さらにはイタリア系、イギリス系、ポルトガル系の3つの血を有してい」(p.115) いる。そこへ椿阿春という中国人(モンゴル系)の血が入る。2人のあいだには、「1/32のポリネシア系、1/16のイタリア系、1/16のポルトガル系、1/2の中国系、そして11/32の英米系」(p.115) の子供が生まれることになる。しかも、計15人も。上3人の息子と下12人の娘たちの体型や顔立ちから彼らの受ける教育に至るまで、いわば非の打ちどころのない家族となるはずであった。ところがこのあたりから徐々に、椿阿春とのあいだに軋みが生じはじめる。子供たちは西洋文化のもとで成長したために、彼らの「かけ離れたわかりにくい願望と精神作用」(p.122) が彼には理解しがたい。「何かにつけ、東洋を西洋と分け隔てる壁にぶつかった」(p.123) というわけだ。「一介の日雇い人夫から億万長者へと昇りつめた」(p.118) ことに一種空疎感が走る。そして、あの阿仇と同種の「平穩な老齡」「安らぎと休養」(p.124) を希求するようになる。最終的には、妻と子供たち全員に多額の財産分与をして、自分は故郷の広東へはもどらず、マカオ(澳門)へと向かう。ハワイでは家族内でごたごたがあつて、忠告を送ってやりながらも、彼自身は「平穩と落ち着きを勝ちとった」(p.132) (傍点引用者) というものである。

こうして見てくるとこの作品も、1文1文が深い意味あいを持つ連なりになっていることがわかる。さらなる留意点を2、3指摘しておきたい。まずは、「とことんアジア人であり、ということはずまり、異邦人である」(p.122) との椿阿春の認識である。この点も、阿仇がタヒチのフランス人たちに抱いた認識と共通するだろう。彼にはアジアとその精神を体現するところが厳然としてありながら、その一方で、本項の冒頭で触れたステラ・アレンデイルとの結婚による驚くべき多人種混血が実現してもいる。後者の点から言えば、まさにちょうど百年前から世界の未来(現に急速に進む今日の国際化・グローバル化)をみごとに予測・先取りしていたことになり、前者からすると、百年後の今日でさえ厳然たる事実として在る東洋と西洋の違いをその源流をさかのぼるように描いてみせたということであろうか。

次に、ハンセン病への言及である。そういえば、「支那人」にも書きこまれていた。アーティマオーノウまで荷馬車に乗って送られていく場面で、憲兵のクリュショが諭す

「そんなふうには死ねるなんて、おまえは運がいいぜ。あの病気にでもかかってみろ、じわじわとくずれて、めちゃくちゃになるかも知れんのだぞ。指が1本落ちる時があるかと思え

ば、時には親指、また足の指といったふうにな。俺の知ってるやつで、熱湯をかけられたのがおった。そいつは、死ぬのに2日かかったよ。そいつの叫び声が、1キロ離れたところからでも聞こえたぜ。それにしてもおまえは？ あー！ いとも簡単なこった！ チャックン！——刃が、おまえの首をそんなふうに切るんだ。それでおしまいさ。刃はくすぐったいぐらいかも知れん。……」(p.66)

という、何とも形容しがたい理不尽極まりない表現である。「椿阿春」では、あれこれと投資を始めた頃のことで、土地を「買った相手は、現金の必要な商人、貧乏な原住民、貿易業者の騒々しい息子たち、未亡人や孤児やモロカイへ追放になったハンセン病患者たちであった」(p.113)とある。やむなく土地を売ってモロカイ島へ送られる各患者を彷彿させる重い文言である。

もう1点、この作品のエンディングが広東ではなくて、マカオに落ち着いた点だ。元ポルトガル領で、1999年に中国へ返還された所で、地図で見ると、South China SeaのIslandsを隔てて香港の西側に位置する。[インターネット情報によると]「古いヨーロッパの雰囲気を残すマカオは、(中略)西洋と東洋、歴史と現代を持ち合わせた大勢の観光客が集まる魅力的な街」とある。つまり、「歴史と未来の詰まった街」だとすれば、まさに椿阿春にとってはふさわしい安住の地だったということになるのか。

### iii) 「<sup>アー・キム</sup>阿金の涙のわけ<sup>26)</sup>」

最後に「阿金の涙のわけ」に移ろう。この作品は、1916年6月13日（療養を兼ねてのホノルル滞在中）に執筆を開始しているから、死亡する半年足らず前ということになる。前年あたりから尿毒症のひどい発作が起きたりして、16年頃には「ますます進行する末期尿毒症の諸徴候」とともに「腎臓結石の激痛に襲われ<sup>28)</sup>」たりして、すでに先が見えだしていた、いわば最晩年に書かれた作品の1つということになる（但し、最後の作品ではない）。無論、本短篇集においても最後に配しており、そのすぐ前の作品「比類なき侵略」の雑誌発表が1910年（書きはじめは1906,7年頃）であることを考えあわせると、かなりの時間差がある。おまけに「阿金の涙のわけ」所収の短篇集 *On the Makaloa Mat* 出版は、彼の死後3年近くもちの1919年9月のことになる。

あらすじは、「訳者あとがき」にある通り、ホノルルのチャイナタウンで、大きな雑貨商の経営者で50歳の阿金が、74歳の母親に竹の棒で叩かれるが、彼の顔は満足げであり続けた。ところが年月が経つにつれ、生まれてはじめて涙を流すことになる。原題は「阿金の涙」だが、なぜ涙を流したのかとの含みを持たせて「阿金の涙のわけ」〈傍点筆者〉との邦訳にした。

中国での苦役を経て、26歳でハワイへ渡り、5年の年季が明ける頃には巨額の預金を手にしており、社会での出世階段を着実に登っていく。その下支えをしているのが忍耐力であるあたりは、椿阿春の経歴とも重なる。また、人生の最終段階にいわゆる「瞑想と休息の庭」を所有する（したい）夢を抱くという点も、実現はしなかったが「支那人」の阿仇とも共通する。椿阿春にしても、「安らぎと休養」(p.124)を望んだ。

さて阿金の場合には、同じハワイでも中国人の母親戴虎<sup>タイ・フー</sup>と、阿金が結婚相手に望む李<sup>リー・ファー</sup>（40歳）とのあいだに価値観・伝統・風習等の相違があり、それらを互いに押しつけようとして確執が生じる。母親は中国からそのまま持ちこんだ古い体質を固持し、彼女の視点からすると李

発は「新しいタイプの男女同権論者」(p.174)でけしからんというわけである。その象徴的な言い分を見てみよう。

「それは、中国のやり方よね。私は、中国のことはわからないけど。でも、ここはハワイなんだし、どんな外国人の慣習だって当地流に変わるわ」(p.178)

この落差(東洋的嫁・姑の関係)を面白いようにさばいた作者の力量もさることながら、阿金からすれば、兩人ともに大切な存在である。彼にとって母親は尊敬すべき人であり、一方李発も「新しいタイプの人間だが、ずっと一緒にはいてほしい存在」(p.175)というわけで、まさに板ばさみ状態に追いこまれるのである。この<sup>せめ</sup>闘ぎあいは、ユングの唱えた考えに則したきわめて当代のものでもある。中田幸子氏の紹介によると、

意識・個人的無意識に加えて、集団的無意識を説き、これは種族的経験に基づくもので、個人の心の真の基礎をなすものだと言う。「先祖代々の生活の残滓」である過去が、一個人の現在につな<sup>29)</sup>がる

という。とすれば、戴虎の執着はその表われであり、李発のそれはやはり今日ただ今進行中の国際化あるいは“グローバル”化を百年も前に先取りした本格的なものだと言えよう。一方阿金は、「複雑な心の奥底には、過去にほこりまみれの人夫だったことがずっとトラウマになっているという点で、古い考えがあった」(p.174)から、この両者の価値観のはざまにあって大きく揺れ動くというわけだ。その思い悩みに手痛く襲いかかるのが、母親の竹の棒による殴打である。そして長らく甘受してきた殴打も、李発との一件で終局を迎える。李発との激しいやり取りのあとの竹の棒による殴打が弱々しいものとなる。すると、泣いたためしなかった阿金が泣くのである。そしてこの2年後に、母親は亡くなる。阿金と李発は、その後まもなく結婚する。泣いた理由を李発に問われた阿金は以下の説明をして、物語は幕となる。

「お袋に死に神が近づいている、とそのとき不意に感じたからなんだ。いくら叩かれても、まるで力が入ってなくて、ちっとも痛くなかったんだ。ぼくが泣いたのは、お袋にはもう痛い目にあわせる力も残っていないのだとわかったからさ」(p.186)

まるで古典落語の下げを聞くような鮮やかな結末ではある。そういえば、最も初期の「人力車夫<sup>きかいちやう</sup>堺町と妻と、2人の息子の話」からしてきびしくつらい結末であった。他の短篇もすべて(本稿で取りあげなかった「比類なき侵略」も含め)、ストーリーの展開の意外性と巧みな落とし所を心得たものばかりなのである。

ここまで読み進めると、最後に多人種のことにも触れておかねばならない。ハワイは言うまでもなく、代表的な多人種構成社会である。それは、ロンドンの時代から今日まで変わらない。阿金と母親の戴虎が中国人。阿金の妻となる李発は、父親が中国人で母親がカナカ人の温血児。おまけに、李発の最初の夫が中国人、2番めの夫がポルトガル人。この作品においても、まさに多人種を地で行く構成がなされている。ハワイのホノルルのチャイナタウンという限定された一角にも、さまざまな人種の取りあわせを生みだした。幾度もハワイ諸島を訪れ、余生の3/4をそこで過ごし、その気候・人々・文化・風習に親しみ、「人種関係も願ってもない陽気なもので

あり、彼はユートピア社会が社会主義なしに実現するかも知れないと信じはじめた。人種の軋轢あつれきのないのが、彼には不思議であった<sup>30)</sup>ほどの作者にしてはじめて多人種をめぐる諸作品——阿金の物語も——が可能となったわけである。

## V

“多人種もの”の括りくくりが適切な否かは別として、人種をめぐる諸問題は昨今でさえも盛んに聞かれる。ましてロンドンが生まれ育った今から125～135年ぐらい前のアメリカ西海岸一帯には、すでに早くから中国人移民が押し寄せ、その後時代は多少下るが日本人移民の流入もあって、白人労働者とのあいだで由々しき確執が生じ、中・日移民に対する襲撃事件すら頻発した<sup>31)</sup>。つまり、黒人差別はおろか、黄色人種に対する偏見・差別も厳然たる事実として存在し、ロンドン自身もそうした状況をいわば目のあたりに見たり聞いたりしながら成長していったことを銘記しておかねばならない。

さて、さらに時代が下って、ロンドンの死後20～30年後の第2次世界大戦時に目を移してみよう。最近、『民衆のアメリカ史』で有名なハワード・ジン <sup>32)</sup>ボストン大学名誉教授の論稿を読む機会に恵まれた。題して「爆撃」。

枢軸国に対する戦争がおもに人種差別と闘う戦争だったという説を検証できる事例が、もう1つある。米国西海岸の日系米国人の処遇だ。ナチスに対しては軽蔑が、日本人に対しては、もう1つ特別な、人種という要素があった。(p.22)

有色人種の住む2つの都市（＝広島と長崎——引用者注）の壊滅を厭わなかったことには、日本人は人間以下だという頭にこびりついた観念が、おそらく何らかの役割を果たしていただろう。(p.23)

トルーマンは「ジャップ」がソ連の介入ではなく米国の爆弾によって「おしまい」になることを望んでいたようだ。(p.31)

このほかにも衝撃的な証言・告白は、枚挙にいとまがない。“歴史はくり返される”とはよく耳にする表現だが、人間の愚かな言動は連綿と続き収まりがつかないようである。

このような歴史的経緯や背景を勘案しながら、ロンドンの作家としての人種的スタンスをこのたびの多人種もの短篇群に読みこむことによって考察を深めてきた。便宜上、日本をメインにしたもの2篇、ハワイをメインにしたもの2篇、そして中国（人）をメインにしたもの4篇と括って見てもいいものの、その一方で各作品の舞台や背景、それに人種などが錯綜している。その意味では、エッセイではあるが「小笠原諸島にて」は多人種もの出発点ということになるし、それ以下の諸短篇についても人種の問題を抜きには語れない。上に見たさまざまな条件下にあって、ロンドンの握るペンも、結果的につねに人種の絡む数々の作品を紡ぎ出していたことになる。そしてこの『多人種もの傑作短篇選』の8篇については、少なくとも人種差別に基づく偏見といったものはない、と言いきって間違いはない。むしろ、不偏不党というか偏りのない“多人種もの”

になっている。筆者がキングマンによるロンドンの伝記の邦題に付けた『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』であったロンドンであればこそ、数えきれない多人種との出会いを持ち、それが彼の作品の中に取り入れられたのは自然なことではあった。

それでも、長らくロンドン研究に携わってきた筆者の念頭からつねに離れなかったことは、詰まるところ、彼が時代の諸条件・制約（主として白人優越主義思潮）下に置かれながらも、多人種を共感を持って作品に描きこんだか否や、であった。そうした懸念は、本稿の冒頭で触れた筆者の最初の論文にも「夜の江戸湾一泳ぎ」を扱った際にすでに表明したし、2番目の「Yellow Peril（黄禍）をめぐって——J・ロンドンの場合——」でも扱った。その後も、「ボクシングとJ・ロンドン」「J・ロンドンのボクシング小説」あるいは「*The Scarlet Plague* ——人類終焉の物語——」（以上の5論文も『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』に所収）などで表明・指摘をした。

そうした流れがある一方で、本稿で取りあげた短篇群には一貫して、さまざまな人種をそれぞれの特性を見きわめつつ普遍性を獲得しているものも少なくない。すなわち、それらに通底する見地として「魂の叫び」とも呼べるものがあり、今日も価値観の相違による誤解や争いに悩む全世界の人々への強烈なメッセージをふんだんに内包し得ている作品群である。となれば前節の懸念事項は、すでに見た彼が生きた時代の思潮ないし傾向を知悉するうえでの資料なり証左として逆に活用可能なのではないだろうか。

筆者はロンドンの訳書を出す際に、「訳者あとがき」の冒頭で、たとえば「ジャック・ロンドンはルンペン放浪記も書いていた」などとよく記す。わが国ではロンドンと言えば、一様に動物小説作家のレットルが貼られつづけていたことに少なからず不満を覚え、一念発起して彼の多様な作品群の紹介に乗りだした頃からの癖になってしまったのであろう。その意味で今回も、「いわゆる多人種もの」とでも呼べる興味深い優れた短篇も数多く書き残した」と記した所以である。そしてこの期に及んで、従来の「極北（クロンダイク）もの」「南海（南太平洋）もの」「歴史的空想作品」等々といった括り方にも一理ありとはするものの、大枠のところで大なり小なり“多人種”が絡んでいることに気づくようになった。

それは、昨年度秋学期に同志社大学の2年生ゼミで「極北の地にて」（“In a Far Country”）を入念に読んだ際のことである。「極北（クロンダイク）もの」という括りにまったく異論はないのだが、主人公の2人カーター・ウェザービーとパーシー・カスファートを中心にこの物語が展開していくうえで欠かせない他の登場人物たち（冒険家一行）の人種に気づいたのである。チペワ族の女と改宗者の航海冒険野郎とのあいだに生まれたジャック・バプティストや先祖代々伝わるチュートン族の頑固さを体現するスロウパーという男をはじめとする人夫たちの存在が、物語の前半を引っばる。……要するに、本稿で取りあげた日本・ハワイ・中国に限らず他の諸作品においても、さまざまな人種が小さいながらもそれぞれの役割を担っている点なのだ。そうした点に着目していけば、またあらたな視座が開けてくるように思われるのである。……

最後に、リースマンの言葉を引いて本稿を締めくくっておこう。

There are especially memorable nonwhite heroes such as “An Odyssey of the North,” “The League of the Old Men,” “Chun Ah Chun,” “Koolau the Leper,” and “Mauki.”

These Other heroes and their voices make London's handling of race in his writings truly distinctive. London's identifications with so many different cultures is almost certainly a reason he is one of the most widely translated and read American authors in the world.<sup>33)</sup>

## 注

- 1) 詳細は、拙著『二十世紀最大のロングセラー作家——ジャック・ロンドンって何者?』(丹精社, 2005年5月)を参照。
- 2) 『現代英語文学研究』第3号(現代英語文学研究会, 1975年10月), pp.42-55.
- 3) 辻井・芳川共訳『ジャック・ロンドン 多人種もの傑作短篇選』(明文書房, 2011)
- 4) Jack London, *John Barleycorn* (Santa Cruz: Western Tanager Press, 1981), p. 46. 邦訳は、拙訳書『決定版 ジャック・ロンドン選集5』(本の友社, 2006), p. 22.
- 5) *Ibid.*, p. 107. 邦訳は、同上書, p. 50.
- 6) Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York: Crown Publishers, 1979), p. 209. 邦訳は、拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』改訂版(本の友社, 2004), p. 375.
- 7) Jeanne Campbell Reesman, *JACK LONDON'S RACIAL LIVES: A Critical Biography* (The University of Georgia Press, 2010), p. 2.
- 8) Jack London, "BONIN ISLANDS — An Incident of the Sealing Fleet of '93" (*The (Oakland) High School Aegis*, Vol. X, 1 (January 18, 1895), pp. (1)-2 and Vol. X, 2 (February 1, 1895), pp. (1)-2.
- 9) 辻井・芳川共訳, 上掲書, pp. 8-9. 以下本書からの引用は、引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 10) これについての詳細は、拙稿「"Story of a Typhoon Off the Coast of Japan" 再考——*The Morning Call* をめぐって——」(拙著『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』(丹精社, 2001)) 参照。
- 11) Robert Barltrop, *Jack London the Man, the Writer, the Rebel* (Pluto Press, 1976), p. 31 には、  
"When they left the Bonin Islands there were three months' strenuous work. Their place on the sealing grounds found, Jack pulled the oars in the hunters' boats in the grey, foggy Bering waters, and took his part in skinning seals and salting the hides. The deck every day was like a slaughterhouse, covered with fat and blood, …… (後略)" との記述もある。
- 12) この体験も、のちに *The Road* (New York: The Macmillan Co., November 1907) というユニークな一書となる。
- 13) Irving Stone, *Jack London, Sailor on Horseback* (New York: Doubleday, 1938), p. 69. 邦訳は、橋本福夫訳『馬に乗った水夫』(早川書房, 2006), p. 107.
- 14) Jack London, "Sakaicho, Hona Asi and Hakadaki" (*The High School Aegis*, Vol. X, 7 (April 19, 1895), pp. 4-5.
- 15) ラフカディオ・ハーン(池田雅之訳)『新編 日本の面影』([2000] 角川文庫, 2008), p. 5.
- 16) 同上, pp. 12-3.
- 17) Jack London, "Good-bye, Jack" (*The Red Book Magazine*, June 1909)
- 18) Jack London, "Koolau the Leper" (*The Pacific Monthly*, December 1909)
- 19) Jeanne C. Reesman, *op. cit.*, p. 116. ちなみに、haole とは「白人」、kama'āina とは「その土地に生まれた人」の意である。
- 20) 京都新聞, 2011年4月14日, p. 23 および同紙, 2011年5月3日, p. 7.



- 21) Jack London, "The Chinago" (*Harper's Monthly Magazine*, July 1909)
- 22) Russ Kingman, *op. cit.*, pp.198-200. 邦訳は, 上掲拙訳書, p.356.
- 23) 池田節雄著『タヒチ——謎の楽園の歴史と文化』（彩流社, 2005）, pp.123-4. ちなみに, 同書 p.138 にも「タヒチにおける中国人社会は, 20世紀初めに大きく変貌した。1914年以前には約1千名であったアジア系住民は, 1926年には3989名, 1936年には4575名にまで増加した」との記述もある。
- 24) Russ Kingman, *op. cit.*, p.24. 邦訳は, 上掲拙訳書, p.36.
- 25) Jack London, "Chun Ah Chun" (*Women's Magazine*, March 1910)
- 26) Jack London, "The Tears of Ah Kim" (*Cosmopolitan*, July 1918)
- 27) Russ Kingman, *op. cit.*, p.266. 邦訳は, 上掲拙訳書, p.476.
- 28) *Ibid.*, p.267. 邦訳は, 同上書, p.477.
- 29) 中田幸子著『ジャック・ロンドンとその周辺』（北星堂, 1981）, p.50.
- 30) Russ Kingman, *op. cit.*, p.260. 邦訳は, 上掲拙訳書, p.463.
- 31) 拙著『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』（丹精社, 2001）, pp.23-6 参照。
- 32) ハワード・ジン著／岸本・荒井訳『爆撃』（岩波書店「岩波ブックレット」No.788, 2010）以下本書からの引用は, 引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 33) Jeanne C.Reesman, *op. cit.*, p.16.

付記：本稿草稿執筆中の2011年5月7日の京都新聞 p.1 に, 平泉とともに小笠原も世界遺産へ, と大きく報じられた。まったくの偶然だが, 「小笠原諸島にて——1893年, アザラシ狩り船隊の一件」から120年近くの時を超えての朗報である。参考に供したい。「6月にパリで開かれるユネスコの世界遺産委員会で, いずれも登録が正式決定される見通しだ」「小笠原は, 国内では05年の知床（北海道）以来6年ぶり, 4件目の世界自然遺産登録を目指す。父島・母島列島を含め約30の島々からなり, 陸地6360ヘクタールと周辺海域1580ヘクタールが登録対象。大陸と陸続きになっただけでなく, 多様な固形種が生息することから「東洋のガラパゴス」と呼ばれる」

補記：本稿清書提出後の6月24日, 第35回世界遺産委員会において全会一致で上記小笠原諸島の世界自然遺産登録が決定された。